

Лингвострановедение を踏まえた意味記述についての覚え書 —— Верещагин и Костомаров(1980)における意味に関する諸概念 ——

阿出川 修嘉

キーワード：лингвострановедение，意味論，意味構造，辞書，辞書学

1. はじめに

先に（2014年7月12日）神奈川県において行われた、『シンポジウム・ユーラシアを研究する「言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語」』において、筆者はコメンテーターとして参加する機会を得た。

そこでは、言語教育において「レアリア¹」を扱う際の問題点として、以下のような点について指摘した：

- ① 辞書における「レアリア」の情報の記述をどうするか
- ② ある単語の意味を学ぶ時に、どの意味から学ぶか、学ばせるか
- ③ 学習段階でどれだけ「備え」たいか
- ④ 外国語を知っている、使いこなせるというのはどういうことか
- ⑤ 「Лингвострановедение」という分野

上記の点のそれぞれについて簡単に概要を確認しておこう。

シンポジウムの折にこれら上記のコメントを行った際には、明示的に分類は行っていなかったが、上記のうち、まず①及び②は学習者が触れる辞書に関わる問題である。

まず上記①（「辞書における「レアリア」の情報の記述をどうするか」）は、辞書（あるいは更に言えば学習用教科書についても同様のことが言えるだろう）における項目の記述に、そもそもこうした「レアリア」に関する情報を入れるべきなのかどうか、あるいは入れたとしても、どれくらい、どの程度入れ込むべきなのかといった点についての問題提起である。「レアリア」それ自体は、百科事典的知識と見なすこともできるだろうから、それを辞書にどれくらい入れ込むかは辞書編纂に際しての立場によって異なりうる。ロシア語の詳解辞典などでは原則としてこれらの情報については含まれないのに対し、日本の露和辞典などは比較的多く取り込まれているとされる。こうした傾向は、英語の辞書などでは同様であるとのことで²、日本における外国語の辞書編纂に際しては、そこからの影響

¹ この概念について最初に体系的な分析が試みられたのは、恐らく Влахов и Флорин(1980)が最初だろうと思われる。

² シンポジウムの際の堤正典教授からのコメント。

をも受けていると思われる。上にも書いたとおり，こうした情報を含めるか否かという判断は，辞書編纂に際してどのような方針を取るかによって異なりうるが，これは下に述べる③とも関わってくるだろう。

次に，上記②（「ある単語の意味を学ぶ時に，どの意味から学ぶか，学ばせるか」）については，より具体的な学習のプロセスにおいて辞書（あるいは教科書）を参照する際に生じてくる問題点である。例えば現実の発話（テキスト）においてある未知の語と出会った場合，辞書を参照することになるが，その際その語が多義語である場合には，辞書にどの語義を最初に提示するか，という問題がある。こうした語義の提示順については様々なアプローチが考えられる。例えば，1）語義の派生順にする，2）（派生順には関わりなく）現実に用いられている語義を優先する（既に廃れてしまっている語義などについては提示順を後ろの方にする，あるいはそもそも提示しない），3）（現実に用いられている語義を優先する場合であっても）実際に用いられやすい語義を優先する，などといった方法が考えられるだろう。

そして，上記③及び④は，外国語学習に関わる問題である。

まず，上記③（「学習段階でどれだけ「備え」たいか」）について見ていこう。これは，外国語学習という段階において，どれだけ「備え」を充実させたいかという点につながってくる問題である。もし仮に当該外国語の「レアリア」についての知識が全く無かったとしても，そうした知識を自分が持ち合わせていないということをきちんと相手に伝えることができる，あるいはそうした未知の情報について相手に尋ねて情報を得たりするといった一連のタスクが，その外国語を用いて遂行可能なのであれば，それ自体外国語習得の一定のレベルに到達していると考えられるからである。したがって，学習時にそうした知識は必ずしも必要ではないという立場を取ることもできるだろう。また，このことは，下の④にも関わってくる問題である。

上記④（「外国語を知っている，使いこなせるというのはどういうことか」）は，学習に取り組む際の習得目標の設定に関わる問題である。上でも述べたように，どのレベルにまで到達することを目指すかによって，学習時に得なければならない（言語内的，言語外的双方の）情報は当然のことながら異なってくるだろう。

最後に，⑤（「Лингвострановедение という分野」）として指摘したことは，ここまで述べた点全ての前提となっているものである。それは，主にロシア語の言語教育の分野では既に確立されて久しい。例えば，既にソ連時代の70年代～80年代から，主立ったところでは，Верещагин (Евгений Михайлович; 1939-) や Костомаров (Виталий Григорьевич; 1930-) ³といった研究者によって，この分野の研究は盛んに行われ，Верещагин и Костомаров (1973, 1976), Денисова (1978), Верещагин и Костомаров (1980), 「Словари и лингвострановедение (1982)」といった成果が世に出されており，現在においても「Россия : большой

³ 両者の生年については，Энциклопедия (1996) に依っている。

лингвострановедческий словарь (2007)」、Верещагин и Костомаров (2005) などの研究成果が発表されている。

それに対して、日本では、この「лингвострановедение」という分野が言語教育の分野ではほとんど認知されていない⁴ため、まずそうした分野が研究対象として成立しうることを認識することから始めなければならないのではないのか、ということである。そもそもこうしたトピックがあるという認識それ自体がなければ、それらを言語教育や外国語学習、あるいは辞書の編纂という現場において意識されるはずはない。もちろん、名称は違っていても、同種の概念が外国語教育・学習の現場では扱われているとは思われるが、それをさらに分野として認知、確立していく必要がある時期に来ているのではないだろうか。その際に、ロシア語学における取り組みは当該分野の先達として大いに参考にできる部分があるだろう。

上記の五点について、先のシンポジウムでは指摘した。これらはいずれも、当該外国語の習得レベルがどのようなレベルであっても、学習のプロセスにおいて学習者が常に接することになる、教科書、辞書、あるいは教師といったそれぞれの要素にも関わってくる問題である。これらの要素が、上に述べたような一連の（言語内的、言語外的な）情報を、どのように、どの程度提供するのか（あるいはできるのか）という点については、今後更に議論が深められ、また実際の学習の現場においても試行錯誤を重ねていくべきであろう。

このような問題意識の下、本稿では、これらの要素のうち、まず辞書に関わる部分について取り上げることにする。辞書の編纂・記述に関わってくる重要な部分である、лингвострановедение の成果を踏まえて語の意味を記述していく上での重要な概念について、主に Верещагин и Костомаров (1980) での記述に沿って確認していく。今後辞書の意味記述を行うにあたって、そのあるべき姿を追い求め考えていく際の指針の一つとして、これらの諸概念を書き留めておくことにする。

以下、まず第二節で「語」とそれが表す意味についての基本的な概念について概観した後、第三節において、これらの基本的な概念を踏まえた上で、辞書の語釈において欠けているものについて考察し、今後補っていくべき課題として位置付ける。

2. 言語学の単位としての「語」とそれが表す意味についての基本的な概念

2.1. 概要

本節では、まず「語」という単位について、またその「語」が表す意味について、Верещагин и Костомаров (1980) における基本的な理解について確認する。

他の言語記号と同様に、「語」もまた「表現面 (план выражения)」と「内容面 (план содержания)」とを有している。「表現面」は、語の形態的側面を指し、「語彙素 (лексема)」

⁴ このことは、そもそもこの術語に対して日本語の定訳が存在していないという点からも伺うことができる。

とも呼ばれるものである。それに対して、「内容面」は、語の意味的側面を指し、Верещагин и Костомаров (1980) では、「概念 (понятие)」, あるいは「語彙概念 (лексическое понятие)」とも同定されている (cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 13)。

本稿では、語の意味的な側面に注目するため、「内容面」に関わる諸概念について中心的に見ていくことにする。その観点から、Верещагин и Костомаров (1980) における、語の意味構造に関する考察を概観するが、次の第 2.2.節で「語」の意味構造について確認する。そして、第 2.3.節において「語」の「意味の構成要素 (семантические доли)」の種類について見る。

2.2. 語の構造

2.2.1. 概要

ここでは、「語」という単位の意味的な側面に関する以下の諸概念について確認する：

- ① 「(語彙) 概念」
- ② 語彙素, 語彙概念, 対象という三者間の関係
- ③ 「意味の構成要素 (семантические доли)」

2.2.2. 「(語彙) 概念」: その意味と機能

「概念 (понятие)」(「語彙概念 (лексическое понятие)」とも) とは、「規則 (правило)」のことである。この「規則」を、ある「対象 (объект)」を記述する (あるいは描写する) 際に適用することによって、その「対象」が、そこで問題となっている「名称 (наименование)」と一致する集合に属しているのかどうかを画定することができる (cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 13)。

また、「概念」は、その機能という観点からすると、物を分類するという人間の認識能力の道具であるとされている (cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 13)。「概念」の持つこの機能は、ある具体的な「対象 (предмет)」, あるいは「現象 (явление)」が、同一・同種の「対象」(あるいは「現象」) に帰属しているのか、あるいはそうでないのか (別の物, 別種のものなのか) を画定するという点にある (cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 13)。

例えば、自分の目の前にある「物」(つまり「対象」) が、「椅子」であるのか (つまり、「椅子」という語によって表される物の集まりに属しているのか)、あるいは「机」であるのか (「机」という語によって表される物の集まりに属しているのか) ということを判断する際に、「椅子」あるいは「机」という「概念」の機能を用いて画定され、また逆に、「概念」によって画定された、これらの「物」(「対象」) は、「椅子」あるいは「机」と名付けられるということになる。

この「概念」は、人間の認識と強く結び付いている。その一方で、語の形態的側面 (表

現面)である「語彙素」とも結び付けられており、「言語(ラング)」に属するものでもある。つまり、言語を構成している言語単位の方が、語彙概念に影響を与えることもありうるのである(cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 13)。

しかしながら、「語彙概念」は、人間の思考や認識が産み出したものであり、そのため言語外現実によって決定されるものである(cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 14)。

また、「語彙概念」を構成しているのもまた、「語彙概念」である(cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 14)。例えば、ロシア語の「стул」という「語彙概念」を例にとると、「家具の一種」、「背もたれ」、「肘掛け」といった「語彙概念」から構成されている(この「椅子」という語の構造については下でも詳しく見る)。

2.2.3. 語彙素, 語彙概念, 対象 : 三者の関係

Верещагин и Костомаров(1980)では、オグデンとリチャーズ(cf. Ogden and Richards 1927)による「三角形」に言及する形で、ここまで見てきた「語彙素」、「語彙概念」、そして言語外現実である「対象(предмет)」という、三つの概念の関係についてまとめている。

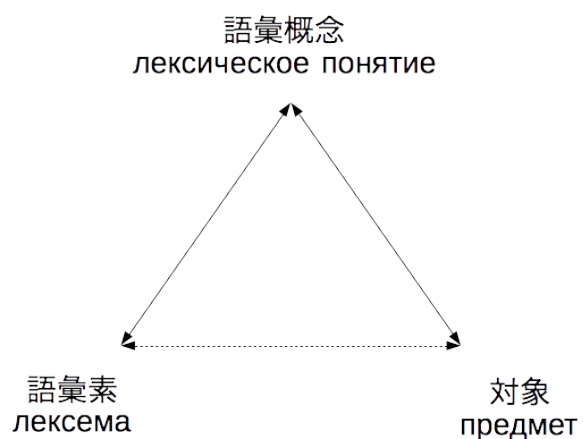
下に、「語彙素」、「語彙概念」、そして「対象」の三つの関係についての図で示した。下図では、Верещагин и Костомаров(1980)において提示してある図の中で用いられている術語を、Верещагин и Костомаров(1980)の本文での説明に応じた形で置き換えてある(cf. Верещагин и Костомаров 1980 : 19)。

下図からも見て取れるように、「語彙素」と「対象」とは直接結び付けられるものではない(そのため図中では破線で示してある)。なぜなら、「対象」は、「語彙概念」を経由して初めて、「語彙素」と結び付けられるからである。

当該「対象」の分類には、少なくとも二つの段階を経なくてはならない。第一の段階として、「その対象が何であるかが分かること(узнавание)」であり、第二の段階は、その対象を「名付けること(называние)」である。

つまり、「語彙素」(あるいは「語」)は、「語彙概念」を名指しているのであって、その「語彙概念」を通じてのみ、当該「対象」は示されるのである。

図 1 : 意味, 語彙概念, 対象の関係
(Верещагин и Костомаров 1980)



2.3. 語の「意味の構成要素 (семантические доли)」

2.3.1. 概要

この節では、上で見た「語彙概念」についてより詳しく見ていくことにする。

まず、この「語彙概念」を構成している『意味の構成要素 (семантические доли)』について確認する。これは、「(意味) 特徴 (признак)」、「意味要素 (семантический компонент)」、「意味乗数 (семантическая множитель)」などとも呼称されているものである。以下本稿では、このうち最も簡明な術語であると思われる「意味要素」という術語を主に用いることにする。

そして、この「意味要素」は、Верещагин и Костомаров (1980) では、その機能に応じて分類が試みられているので、それについても触れる。

2.3.2. 「意味要素」

「意味要素 (семантические доли)」とは、上で見た「語彙概念」を構成しているもののうち、基礎となる («элементарный») ものについて、Верещагин и Костомаров (1980) では特に取り上げ、このように呼んでいる。

この「意味要素」は、それ自体が自立したものであり、ある意味要素は、それぞれ異なる別の語に含まれることもありうる。例えば、「椅子」という語彙概念に含まれている「家具」という意味要素は、(当然のことながら)「椅子」だけに含まれているものではなく、「机」、「棚」などの他の語彙概念にも含まれている (cf. Верещагин и Костомаров 1980: 15)。

Верещагин и Костомаров (1980) に沿って、「стул」、「табурет (табуретка)」、「кресло」という3つの語の比較を通して、それぞれの語の「意味要素」について考えてみよう。これらは、いずれも「家具」であり、「その上に座るもの」であり、「一人用」であるということは共通しているが、「背もたれの有無」と「肘掛け部分の有無」という点について異なっている。「背もたれ」が無い場合には、それは「табурет (табуретка)」であり、肘掛けがある場合には「кресло」となる。今ここで挙げた「家具」、「その上に座るもの」、「一人用」、「背もたれの有無」、「肘掛け部分の有無」といった特徴は「意味要素」であり、これらの要素の有無について表の形にまとめると、以下のようなになる：

表 1 : стул, табурет, кресло の意味要素の比較

語 \ 意味要素	家具	上に座る	一人用	背もたれの有無	肘掛け部分の有無
стул	+	+	+	+	-
табурет (табуретка)	+	+	+	-	-
кресло	+	+	+	+	+

上表で、それぞれの意味要素を有している場合にはプラスの記号で表わし、有していない場合にはマイナスの記号を用いて示している。

これらの意味特徴の有無により、これらの語は、語彙体系内においてお互いに対立を成しており、そのため共存が可能となっているということになる。

2.3.3. 概要：「意味要素」の種類

上で「意味要素」について見たが、Верещагин и Костомаров (1980) では、これを大きく以下の二つに分類している：

- ① 『概念分類に関わる意味要素 (понятийные семантические доли)』
- ② 『概念分類以外に関わる意味要素 (непонятийные семантические доли)』

以下では、それぞれについて確認する。

まず、『概念分類に関わる意味要素 (понятийные семантические доли)』について確認しよう。

これは、上で見た「概念」の果たしている役割の最たるものである、物(対象)を分類するという役割を果たす意味要素のことを指している。

上で見た、「стул」、「табурет (табуретка)」、「кресло」の場合を例にとって考えてみよう。これらは、「家具」で、「一人用」で「上に座る」物であるというそれぞれの特徴を共有しており、それによって他の語、例えば「机」や「学校」などとは異なる物であると、我々の意識の中では区別(分類)されている。このような区別(分類)のための道具として役立っているのが、上でも述べた「概念(語彙概念)」というものなのである。この意味要素があることによって、ある概念とある概念とが別のものであるということが判断できるのである。

それでは、もう一方の『概念分類以外に関わる意味要素 (непонятийные семантические доли)』(あるいは『背景の意味要素 (лексический фон, фоновые семантические доли)』)とは一体何だろうか。

やはり、Верещагин и Костомаров (1980) の例にならい、「аптека」、「drug store」という二つの語について考えてみよう。「аптека」と「drug store」は、共に「薬を買うことのできる場所」という、共通の語彙概念を有しているが、「背景の意味要素」において大きな差異がある。

アメリカの「drug store」では、薬を買うのはもちろん、それ以外にもサンドイッチやホットドッグのような食料品、ガムなどの嗜好品、また切手なども買うことができるという。それに対して、ロシアの「аптека」では、そうしたものは買うことはできない。こうした差異があるために、例えば、下のようなロシア語の例は(音韻的・文法的には全く正しいが)意味を成さないように響くということになる：

(1) Пойди в аптеку и купи почтовую марку!

「аптека」に行って郵便切手を買ってきて！

これは、「切手が売られている」という意味要素が、ロシア語の「аптека」には含まれておらず、「drug store」に独特のものであるからである (cf. Верещагин и Костомаров 1980: 23).

日本語に置き換えて考えてみると、「аптека」や「drug store」に凡そ対応するものは「薬局」、「ドラッグストア」、「コンビニ」といったあたりになると思われるので、これらの語を用いると以下のようなようになる：

(2) 薬局に行って、切手を買ってきて！

(3) ドラッグストアに行って、切手を買ってきて！

(4) コンビニに行って、切手を買ってきて！

上記のうち、本稿執筆時点で意味を成すと考えられそうなのは例（４）のみであることから⁵、言語間の対応関係は大まか以下のような対応関係が想定できるだろう：

表 2：概念の各言語での対応関係

ロシア語	日本語	英語
аптека	薬局	drug store
—	ドラッグストア	
—	コンビニ	

Верещагин и Костомаров (1980) では、同様の例が他にも挙げられているが、ここでは、「почтовые ящики」と「postbox」という語を取り上げてみよう。ロシアにおいては「почтовые ящики」は、通常建物の壁面に設置されているものであるのに対して、英国（及びかつてその支配下にあった国々）では、「postbox」は、道に立っているものであるという点で異なっている (cf. Верещагин и Костомаров 1980: 24)。どちらも、「配達されてきた郵便物を収めておく箱状の物」という点では共通しており、同一の概念を指しているものと考えられるが、壁面に設置しているのか、道路に設置されているのかという点まで考慮すると、全くの同一物とは言えない、ということになる⁶。しかし、この「壁面に設置されている」といった意味要素は、この語（ないしは「概念」）を、他の語と区別する際には必ずしも考

⁵ 日本においても、コンビニエンスストアで切手を買えるようになったのは、この業態が発足した当初からではなかったように思われる。そのため、語の担う「背景的意味要素」は時間とともに絶えず加減し、変化しうることになる。

⁶ Верещагин и Костомаров (1980) において、他に挙げられている例は、「журналист」、「почтальон」、「аптекарь」と、フランス語の「journaliste」、「facteur」、「pharmacien」といった語の対比などである (cf. Верещагин и Костомаров 1980: 23-24)。

慮しなくてもいいものである。

このように、語には、「概念分類に関わる意味要素」だけではなく、言わば付加的な「背景の意味要素」も内在しているのである。Верещагин и Костомаров (1980) では、このような、概念の分類という最も主要な機能に直接関わるものではないけれども、語に含まれている意味要素を、「概念分類以外に関わる意味要素」と位置付けているのである。これは、「背景の意味要素 (лексический фон, фоновые семантические доли)」とも呼ばれる。

2.4. まとめ:「語」の組成としての「語彙素」と「意義素」

本節では、表現面と内容面からなる「語」の組成について、特に後者を中心にして確認した。

表現面には「語彙素」という単位が設定されており、それに対して内容面に対して設定されている単位は『意義素 (семема)』である。

「意義素」は、いくつかの意味要素 (意味の構成要素 = семантические доли) から成っている。そこには、物 (対象) を分類することを可能にしてくれる、「語彙概念 (概念分類に関わる意味要素)」と、それ以外の、物の分類には直接関わらない「意味要素」を有している。後者の「概念分類以外に関わる意味要素」を、「背景の意味要素」と位置付けている。

これらをまとめると下図のように示すことができるだろう。下図は Верещагин и Костомаров (1980) において提示されている図 (cf. Верещагин и Костомаров 1980: 26) に、適宜必要な術語を補うなど、筆者が改変を加えたものである：

図 2：言語における「語」の組成

語	表現面	語彙素		
	内容面	意義素	(複数の) 意味要素	語彙概念 (概念分類に関わる意味要素)
				背景の意味要素 (概念分類以外に関わる意味要素)

また、上の「стул」の例でも見たように、「語彙概念」、「背景の意味要素」共に、単一の意味要素から構成されるばかりではなく、複数の意味要素から成っている場合もある。

3. 露和辞典の語釈に欠けている部分について

3.1. 現行の辞書の語釈とそこに欠けている要素

ここまでで、語の意味を構成している要素について概観した。この節では、これらの意

味要素を踏まえつつ、これらを具体的に辞書の語釈の記述に活かしていくにはどうするかを考えてみたい。

例として、上でも見た「стул」という語に与えられている語釈を確認してみよう。ここでは差し当たり、日本で刊行されている二冊の露和辞典を取り上げる（cf. 研究社露和辞典, 岩波ロシア語辞典）。それぞれの辞書では、下表に示すような語釈が与えられている⁷：

表 3：「стул」に対する語釈の比較

辞書	語釈
辞書 A	① いす ② [定語を伴って] (～の) 地位, 職 ③ 《口語》(機械などの) 台, 台架 ④ 《単数のみ》【医】便通, 通じ
辞書 B	① 椅子, 腰掛け (一人用で背もたれのあるもの) ② 《口語》(職務の) 座, 席, ポスト ③ (機械, 装置の) 台座 ④ 《単数のみ》【医】便通

これらの語釈から、先に見た、ロシア語の「стул」という語の意味要素が、この日本語の語釈にどの程度反映させることができているかについて考えてみよう。

上の語釈のうち、辞書 A の語釈を見る限りでは、上で見てきた、この語の持つ一連の意味要素（「家具」、「上に座る」、「一人用」、「背もたれ」、「肘掛け部分」）のうち、「概念分類に関わる意味要素」しか記述されていないことが分かる（「家具」、「上に座る」といった意味要素は日本語の「椅子」という語にも含まれている）。この意味要素が記述されていれば、他の物との区別が可能になるという意味では誤りではない。しかし、その場合、「いす」と「机」や「棚」などの、その他の家具（その他の「対象」との区別しかできない。「背景的意思要素」が十分に記述されていないため、同じ「家具」で「стул」の一種ではあるが、「対象」としては異なる物である、「табурет」や「кресло」との区別については、この語釈だけを見る限りではできないだろう⁸。日本語の「いす」という語には、「一人用」や「背

⁷ 下表では、提示されている語釈を順に列挙することに主眼を置き、語釈を提示する際の順番や提示方法などは、ここでの引用に際しては形式を統一してある。また、用例等についても省略している。

⁸ なお、ロシア語の詳解辞典である Большой толковый словарь (1998) の語釈を見てみると、以下のような語釈が与えられている（同様に例文等は省略）：

- (1) Род мебели: предмет на четырёх ножках, без подлокотников, обычно со спинкой, предназначенный для сидения одного человека;
- (2) Спец. Подставка под какой-л. механизм, инструмент, строение и т.п.;
- (3) только ед. Действие кишечника; испражнение.

もたれがある」といった意味要素は、(少なくとも筆者の語感に照らしてみると)含まれていないからである。

このような、意味要素がどれだけ語釈に反映されているかという観点から見ると、辞書 B の語釈の方が、辞書 A の語釈よりも、より適切にロシア語の「стул」という語の表す概念を示す可能性がより高いと言えるだろう⁹。

このように、現行の辞書では、その語の有している「意味要素」が全てカバーされているとは必ずしも言えず、また「背景的意思要素」についても同様に記述されていないというケースがあるということが分かる。したがって、その語の持つ全ての「意味要素」が日本語の語釈に反映されていないということになる。

現状の抱える問題点としては、これらの意味要素が、(教師も含めた)個々人の知識の多寡に委ねられる形になってしまっており、学習者と共有されていないということなのである。

3.2. 必要十分な語釈提示の実現を妨げている要素

それでは、なぜ従来の語釈では、全ての意味要素が反映されておらず、「背景知識を含む意味要素」を取り込むことができているのだろうか。それは大きく分けて以下の二つの要因が考えられるだろう：

- ① 語の意味要素(意味の構成要素)に関する研究が進んでいない(あるいは研究の成果は既にあるが辞書の記述には反映しきれていない)
- ② 物理的な制約

まず第一に、そもそも語の意味に関する研究が進んでいないという可能性が挙げられるだろう。

あるいは、語の意味の分析はある程度進んではいるものの、辞書を執筆する際に、そこで得られている成果が辞書の記述には完全に反映されていないという可能性も考えられる。

もし前者であれば、意味の分析、記述を進めていくために具体的にどのような方法で取り組むべきかを考えてみる必要があるだろう。

それでは、どうやって語の意味の分析に着手するか。取り組む際には、いくつかの段階

このように、上記の語釈の(1)では、家具の一種であること(「род мебели」)、肘掛がないこと(「без подлокотников」)、通常背もたれがあること(「обычно со спинкой」)、一人が腰掛けるためのものであること(「предназначенный для сидения одного человека」)、というように、先に見た全ての意味要素が語釈に含まれている。更に、この辞書での語釈では、これらに加えて、「足が四本(「на четырёх ножках」)」という意味要素も加えられている。

⁹しかし、同時に語釈が説明的な性格を強く帯びることにもなりかねず、一般に語釈に求められる簡明さとの両立という点では難しくなるというのは否めないだろう。

を経る必要があるだろう（ここでは、二言語辞書を念頭に置いている）。

まず、どの語の意味の記述から取り掛かるかという優先順位をつけていくために、何らかの基準により、分析の対象とする語の数を相当程度絞り込んでいく必要がある。

次に、これらの語の「意味の構成要素」を明らかにするべく記述を行っていく。Верещагин и Костомаров (1980) においても断片的に示されているように (cf. Верещагин и Костомаров 1980: 16-17), ロシア語の詳解辞典の語釈を利用することで、「概念分類に関わる意味要素」については、記述を行うことは可能だろう。次に、「概念分類以外に関わる意味要素（背景の意味要素）」についての記述を行う、という段階を踏む。これらの段階を経て、「概念分類に関わる意味要素」と「概念分類以外に関わる意味要素」の双方の記述が出来上がるということになる。

そして、この記述が完成すれば、日本語と対照した場合に、意味の構成要素の比較が可能になり、意味要素の差異が大きいものと、逆にほぼ等しいものとの比較が可能になる¹⁰。その比較を通じて、もしロシア語と日本語とで差異が大きい場合や小さい場合に、それぞれどのように語釈をつけていけばよいかということが具体的に検討できるようになる。

しかしながら、仮に語の意味に関する記述が十分成されていたとしても、その情報を辞書に盛り込もうと思った場合に、従来の紙媒体で出版される形態では、紙数といったスペースの制限という観点から限界があるであろうことも想像できる（上記の②）。この点については、時代の進展とそれに応じた科学技術の発展によって解決される可能性は高い。今後、辞書の出版も電子版が主流となっていくことには間違いはなく、そうすれば紙数という物理的制限から解放されるだろう。しかしながら、そうした状況が訪れた場合には、今度はその状況に則した適切な記述が求められてくるので、どのように、またどの程度まで、それぞれの意味要素を提示していくのかについては絶えず議論が求められるだろう。

4. まとめ

本稿では、Верещагин и Костомаров (1980) における語の意味についての諸概念についてまとめた。

従来からあるいわゆる「成分分析」の手法であることには間違いはないが、Верещагин и Костомаров (1980) では、多様な「意味要素」を、その性質（役割）に応じて、「概念分類に関わる意味要素」と「概念分類以外に関わる意味要素（背景の意味要素）」とに明示的に分類しているという点で興味深いものとなっている。

管見によれば、上でも少しく触れた通り、恐らく前者の意味要素は、時間・時代の推移による変化を受けにくいという意味で「固定的」なものであり、後者の意味要素は、時代の推移などにより大いに変化を受けやすく、「流動的」な性質を持っているのではないかと

¹⁰ 同様の手法によって日本語の語の意味要素も明らかにすることが必要だが、ここではひとまず脇に置く。

思われる。

「概念分類に関わる意味要素」を適切に語釈に含めるということは、必要最低限の課題であり、これまでの意味論あるいは辞書学などの中心的な課題であったと考えられるが、今後更に求められてくるのは「背景的意味要素」の適切な記述だろう。その際、「背景的意味要素」の内容は流動的なものでありうるという性質を踏まえ、そうした現実の変化、及びそれに伴うロシア語の変化を、絶えずとらえて適切な語釈を付けていくことが求められる。

このような、絶えざる語の意味の変化に追いつき、記述に反映させるというのは、旧来の、紙媒体で発行されてきている辞書が最も苦手とする部分の一つであると言えるだろう。今後、辞書の発行形態として電子フォーマットが主流となっていくにつれて、こうした「変化」を反映させやすい土台が出来上がってくるものと思われる。そうなった時に、今度は「新たな」辞書の、語釈の記述及び提示の方法、辞書自体のリリースの方法、またそれに応じた辞書の編纂体制の確立というものも新たな課題となってくるだろう。

5. 文献

- Большой толковый словарь русского языка* / гл. ред. С.А. Кузнецов. СПб., Норинт, 1998.
- Верещагин, Е.М., Костомаров, В.Г. 1980. *Лингвострановедческая теория слова*. М., Русский язык.
- Верещагин, Е.М., Костомаров, В.Г. 1973. *Язык и культура : лингвострановедение в преподавании русского языка как иностранного*. М.: Изд-во Московского университета.
- Верещагин, Е.М., Костомаров, В.Г. 1976. *Язык и культура : лингвострановедение в преподавании русского языка как иностранного. Изд. 2-е, перер. и доп.* М.: Русский язык.
- Верещагин, Е.М., Костомаров, В.Г. 2005. *Язык и культура : три лингвострановедческие концепции : лексического фона, рече-поведенческих тактик и сапиентемы*. М.: Индрик.
- Влахов, С., Флорин, С. 1980. *Непереводимое в переводе*. М.: Международное отношение.
- Денисова, М.А. 1978. *Лингвострановедческий словарь* / под редакцией Е.М. Верещагина и В.Г. Костомарова. М.: Русский язык.
- Россия : большой лингвострановедческий словарь : 2000 реалий истории, культуры, природы, быта и др.* / под общей редакцией Ю.Е. Прохорова. М., АСТ-ПРЕСС, 2007.
- Словари и лингвострановедение : сборник статей* / под редакцией Е.М. Верещагина. М.: Русский язык, 1982.
- Русский язык. Энциклопедия. Изд. 2-е, перер. и доп.* / под главной редакцией Ю.Н. Караулова. М., Большая российская энциклопедия ; Дрофа, 1996.
- Ogden C.K., Richards I.A. 1927. *The Meaning of Meaning : a study of the influence of language upon thought and of the science of symbolism*. 2nd ed., rev. London : K. Paul, Trench, Trubner

& co., ltd ; New York : Harcourt, Brace and company. ¹¹

東郷正延，染谷茂，磯谷孝，石山正三（編）．1988．『研究社露和辞典』．研究社．
和久利誓一，飯田規和，新田実（編）．1992．『岩波ロシア語辞典』．岩波書店．

¹¹ この文献に関しては Верещагин и Костомаров（1980）において提示されている書誌情報に沿って文献を示している．その際，サブタイトル，出版者，版表示の情報について筆者が補った．